

# 中国における幼稚園園内研修の新たな試み

— 実践から学ぶ保育者集団の形成を目指して —

木全 晃子

はじめに

私はこれまで日本と中国という二つのフィールドで、保育者の現職研修に関する研究に取り組んできました。特に、園内研修という日常の保育にもっとも近い場で、保育者はどのように「実践から学ぶ」のか、という点に注目してきました。もちろん、ひと言で「実践から学ぶ」と言っても、人によってその内容に大きな違いがあるようです。その違いは必

ずしも経験値や能力によるものではなく、視点の違いによるものなのですが、各園の中で自然に形成され、無意識のうちに保育者の視点を方向付けているものとも言えそうです。

そこで本稿では、中国の事例から「実践から学ぶ」保育者集団の育成を独自の方法で進めているものを取り上げ、以上の点について具体的に考察してみたいと思います。私たちの身近な状況とはかけ離れた例と感じられるかもしれませんが、園内研修の

あり方と実践の省察との関係性が、より鮮明に見える  
てくるのではないでしょうか。

## 北京市W幼稚園のカリキュラム開発プロジェクト

中国では、二〇〇一年の「幼児園教育指導綱要」  
の施行後、新たな幼児教育のあり方として示された  
「子どもの遊びを中心とし、環境を通して教育する  
幼稚園」をいかに実現するか、という議論が活発に  
交わされてきました。以下に紹介する北京市W幼  
園（民間立）の事例は、ちょうどその時期にスター  
トした園内研修の事例です。

二〇〇四年、北京師範大学の霍力岩教授<sup>フオリエン</sup>を中心と  
して、W幼稚園と大学との共同研究プロジェクトが  
始まりました。園独自のカリキュラムの開発を兼ね  
た園内研修で、園長はじめ園内の全保育者（当初は  
十九名）が参加し、単発的ではなく継続的に二〇〇  
六年まで行われたプロジェクトです。

私自身は初期の四か月間のみ、参与観察者の一人  
として参加したのですが、その短い間でも、保育者  
の変化は大きいものでした。当初「環境を通じた教  
育」にほとんど具体的なイメージをもっていなかつ  
た保育者が、二か月後には、自分の目で子どもの姿  
をとらえながら保育の「ねらい」を環境の中に構成  
し、ふり返り、再構成するという意識をもつようにな  
ったのです。

W幼稚園では、プロジェクト開始時に研究者から  
園の代表者へ、次のようなカリキュラムの基本構想  
が示されました。

「本幼稚園のカリキュラムは、個別探究活動、グ  
ループ探究活動、集団探究活動（クラス活動）の三  
つを組み合わせる。個別探究活動は主にモンテッ  
ソーリ・メソッドを、グループおよび集団での探究  
活動はレτζジョ・エミリア・アプローチ（プロジェ  
クト保育）から学ぶ。更にHoward Gardnerの多重

知能理論に基づいてポートフォリオを作成し、幼児の個々の学びを把握しつつ、遊びを中心とした総合的な教育を行う。」

中国の幼稚園の先生方が、これだけの多様な保育方法を一つのカリキュラムとして消化することができると、当初は少々不安に感じていた面もありました。モンテッソーリは当然のこととして、欧米の教育理論を幼稚園教育に取り入れることは、現在中国の多くの園で行われていることであり、それ自体は珍しいことではないのですが、往々にして形だけの模倣に終わってしまうケースが多いからです。

### 省察する教師の育成と四段階のプログラム構造

先に、本プロジェクトはカリキュラム開発を兼ねた園内現職研修である、と述べましたが、霍教授は本プロジェクトの目標として「省察型の保育者の育

成」を掲げています。つまり、保育者がカリキュラムを主体的に理解し、実践する力を「省察の実践力」という専門性の中に求めたのです。

更に彼女の独創的な点は、①技術的段階②実践的段階③解放的段階④超越的段階の四つの段階を設けて、省察のレベルを段階的に進めていくというプログラムを組んだことです。長期的にはこの四つの段階がいく度も繰り返されるようデザインされているのですが、具体的には以下のようなプログラムが実施されました。

①技術的段階―研究者（霍力岩）主導で、保育のねらいを環境の中に体现させていく方法について協議し、「探究性」「誘導性」「段階性」などの省察の鍵となる視点が示される（ワークシヨップでの体験的理解を含む）。

②実践的段階―日常の保育を進める中で、ねらいに基づいたモンテッソーリ遊具を自分で開発す

るという課題に保育者がそれぞれ取り組み、子どもの様子を観察して省察し改善を加える。

(保育後の協議会で研究者や他の保育者からもコメントが寄せられる)。プログラム一巡目は、保育者にとって環境構成の意味が比較的理  
解しやすいコーナー保育の実践から始め、二巡目ではプロジェクト保育の実践と省察を行うことが当初から計画されていた。

③ 解放的段階—研究者は現場と距離をおき、現場の保育者だけで、ここまでの実践の成果と課題について省察を行う。研究者から示された枠組みから解放され、批判的に本プログラム自体を考察する段階。

④ 超越的段階—成長した保育者は、新しくプログラムに加わる同僚の学習を支援する立場となり、①から③の段階を再度体験しつつ省察を深める。プログラムの最終的なねらいは、研究者

から離れても園が一つの学びあう集団として園内研修を継続していけるようになることにある。

このような構造的な研修プログラムについて、霍教授はインタビューの中で、「理論上は欧米の先行研究から吸収したものであるけれども、プログラムの組み方は自分自身の長年にわたる実践研究を通して独自に形づくってきたものだ」と語っています。

ここで彼女が述べている、長年にわたる「実践研究」とは、一九九九年以来中国市深圳市で行ってきた実践研究です。私自身は研修そのものには直接参加していませんが、追跡研究として保育観察やインタビューを行ってきました。

#### 深圳市<sup>しんせん</sup>幼稚園での十年にわたる実践研究

中国広東省深圳市の<sup>し</sup>幼稚園は、十クラス計三百名ほどの園児が通う公立幼稚園で、前述の四段階の

研修を霍教授と共に実践してきました。

し幼稚園では、長期にわたり前述の①技術的段階②実践的段階③解放的段階④超越的段階の四つの段階を緩やかに繰り返しており、保育者たちは、膨大な保育記録をつけ続けています。子ども一人ひとりのポートフォリオ(写真1参照)のほか、プロジェクトごとに保育記録ファイルが作られており、子どもの様子が収められた写真や、プロジェクトを行った経緯や週案、保育者のふり返りなどがまとめられています。保育者自ら作成した記録は、それ自体彼女たちの力量形成の過程を表わすもので、実践を省察するためのツールでもありました。

### 本園内研修プログラムの成果と意義

二〇〇五年以降、本研修プログラムは園内だけにとどまらず、夏季休暇中の集中講座が、園外の教員に向けた公開研修として、行われるようになりまし



▲写真1：各クラスの保育室の片隅には、コーナー保育での「個別探究活動」を通して作った作品やその写真、保育者による観察記録などをまとめた、一人ひとりのポートフォリオが並べられている。



▲写真2：2005年の夏季休暇中に行われた「優秀教師現場体験型・専門的力量開発キャンプ」の様子。中央に座っている女性が霍力岩教授。

た（写真2）。現在は、深圳市内の全公立幼稚園が参加する講座となっています。長年の実践を通じた当園のカリキュラムや、教師の専門的力量の向上が教育委員からも評価されているようです。

また、中国の幼児教育全体を見渡してみると、本プログラムの意味がより明らかになってきます。まず、園独自のカリキュラムを開発する園内研修を行うことは、ここ数年、中国教育部が推進してきた一つの大きな流れであり、厳しい外部評価にさらされている各幼稚園が競って取り組み始めているため、L幼稚園やW幼稚園がカリキュラム開発という形で研究者と協働してきたことは、研究者側のニーズというよりも、幼稚園側のニーズから求められたものといえます。

そして、中国の新しい「幼稚園教育指導綱要」が掲げた新しい幼児教育を行うために、個々の子どもに必要な手だてを保育実践の中で考える力が求められていることから、「実践の省察」というキーワードを園内研修のプログラムに具体化したことは、現在の中国の幼児教育のトレンドをよく表していると思います。

## 本事例が示唆するもの

参与観察を通した理解と、この実践に関する霍教授の論文やインタビューなどを踏まえて、霍教授の構想における「省察」の意味をひとりで述べるとば、ここでの「省察」とは次のようなことであると思えます。

霍教授がこれまでの研究に基づいて確立してきた、環境を通して幼児の探究を促すことに重点を置いた、具体的な省察の手掛かりを繰り返し示唆し、保育者たちが段階を経ながらも、それらの視点を身に付け、自立的・主体的に省察できる保育者へと成長していくというものです。

中国では、保育者のための実践ガイドブックとして『幼稚園〇〇カリキュラム(△才児)』などの参考図書が多く出されており、マニュアル的にそれらの保育方法を取り入れる傾向が強いのですが、その

ようなアプローチとは対照的に、カリキュラム開発の主体は保育者自身であると位置づけ、常に保育者による省察を促す霍教授の働きかけが、実践から学びあう保育者集団を形成することにつながったのでしよう。

とはいえ、実践者による実践の「省察」でありながら、前述のように省察の視点が研究者から与えられるものでよいのか、という疑問が残ります。インタビューで率直にこの点を指摘してみたところ、霍教授は「私のプログラムとは違うやり方、つまり、保育者に自由に実践させるような、完全に主導権を実践者の側におくようなアクシオン・リサーチも、一つの方法としてあると思いますが、その場合、教師は自分の考えた一つの実践方法しか試すことができないのではないのでしょうか。また、その場合、一つの体系的な実践モデルを学ぶことはできないでしょう。(中略) 少なくとも、中国の今の幼稚園教

師にとつては、現実的ではないでしょう」と語られました。

確かに教育成果を可視化した形で示すことが強く求められる中国の幼稚園で、保育や保育実践の意味づけを保育者個人に委ねることが難しいのは事実です。しかし果たして、他者から与えられた理論や研究枠組みの中の「省察」で、保育実践の中の豊かな学びを掘り起こし、実践者自身の気づきを促すことができるでしょうか。

実践を省察することの目的が、複雑多様な実践の中で主体的に保育できるような、より実践的な専門性を身に付けることであるならば、既成の理論や枠組みではなく当事者の視点から出発し、実践の中で無意識のうちに行っている保育行為の意味、すなわち「行為の中の省察」<sup>4</sup>を出発点としていくことが必要ではないかと考えています。

これまで、日本の保育研究では豊かな実践研究の

蓄積があり、また「暗黙知」研究も進められてきました。しかし一方で、実践をふり返る視点を、知らず知らずのうちに実践の外に求めてしまいうことも少なくないのではないのでしょうか。このような日本での「省察」の実態と、本事例から浮かび上がってきた「省察」のとらえ方とを照らし合わせながら、実践者の視点から行う省察の意味を今一度考えてみたいと思っています。（お茶の水女子大学大学院）

1 中国で最も早くからモンテッソーリ研究に取り組んだ研究者の一人。国際比較教育学を専門とし、近年ではガドナー研究で多くの著作・論文を発表している。

2 調査日時：二〇〇七年七月三十一日。於北京師範大学。

3 教授自身、ドナルド・ショーンの「省察的専門家」をめぐる論考を引用しているものの、必ずしも厳密にその概念を踏襲しているものではないとインタビューの中で述べている。

4 参考文献

ドナルド・A・ショーン著 柳沢昌一・三輪建二監訳  
『省察的实践とは何か―プロフェッショナルの行為と思考―』鳳書房 二〇〇七年